

祿と記す)之れなり。

天男は「天より生れたる男」の意にして、隋書突厥傳に沙鉢略可汗が高祖に奉りし書の始めに、自己を稱びて「從天生大突厥……沙鉢略可汗」と云ふると同意なり、突厥碑文のエニセイ文字にて記せるものゝ中に、

tängritag tängri yaratmīš türk bilga kagan

天ノ如ク 天ガ 作リシ(生ミシ) 突厥 賢 王

なる語あれば、天男は即ち此の tängri yaratmīš の意を譯し之に男なる語を加へたるものに外ならざるべし。

儲て突厥可汗の稱號に此の如く屢々天なる語を用うるは、只だ何れの未開國民にも存する天崇拜の觀念の現はれたるものとのみ見るよりは、更に深き因由あるが如し、抑も此等のトルコ民族の間に狼を祖先とせる開國傳説の存するは、有名なる事實にして、隋史北史等によれば突厥にも亦た之が存したるを知るべし、然るに魏書高車傳に見ゆるものは、只だ狼を祖先とせるのみならず、更に詳密に之を説きて天が實に彼等を生みたるを云へり、即ち「俗云匈奴單于生二女、姿容甚美、國人皆以爲神、單于曰、吾有此女、安可配人、將以與天、乃於國北無人之地、築高臺置二女其上、曰請天自迎之、……乃有一老狼、晝夜守臺嗥呼、因穿臺下爲空穴、經時不去、其小女曰、吾父處我於此、欲以與天、而今狼來、或是神物、天使然之、……(妹)下爲狼妻而產子、後遂滋繁成國」と、隋書等に記せるものも固とより之を略記せるに過ぐる可し、則ち彼等が屢々天を稱し、其稱號にも之を用うるの理由を推知し得べし。

聖天はたゞ tängri の意を尊稱したるにすれども、骨咄祿は前記の如く qutlug 即ち「幸福」の對音なり、